ひまわりからのメッセージ

76号
2017.9.11
NPOひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人：中野たみ子

# 秋の気配

昼の間、にぎやかに鳴いていた蝉の声が、夕暮れが迫るとパタッと止み、代わって虫の音が高くなります。

八月も終わり、秋の気配が感じられるようになったと思っていましたら、我が庭先で秋明菊が咲きはじめました。雑草の茂る庭に、白花に先がけてピンクの花が二輪咲いた朝、思いがけず黄の揚羽蝶が止まっているのを見つけました。羽を閉じ、かすかな風に秋明菊と共に揺れているのです。近寄っても逃げようとしないので、嬉しくなって写真におさめました。ところが、次の朝も蝶はやって来ていて、近づくと羽根を広げて見せてくれます。三日目、四日目と、早朝に必ず秋明菊に止まる蝶を、何度もカメラにおさめました。

でも四日目、ふと心配になりました。我が家には、至る所にくもの巣が張っていて、私もよく引っかかります。蝶がひっかかっては大変…と思い、見える限りの巣をはらっておきました。でも、五日目、蝶の姿は庭にありませんでした。毎朝の出会いを楽しみにしていただけに、その日は一日、何となく落ち着きませんでした。

その夜のこと、ふと厨房の窓を見ると、外に何か小さなものがぼんやりと見えます。何だろうと思ってガラス越しに目をこらすと、すりガラスに小さな小さな手が見えました。そうです。守宮（やもり）です。我が家にいつも来るのは三匹。以前は二匹だったのが、いつの間にか三匹になって、今年また赤ちゃんやもりが生まれたのです。それにしても何と小さく、かわいい手でしょうか。室内から見ると、余りにかわいくて、しばらく見とれてしまいました。

「先生はストレスをためないのですか」。「何故、いつもパワフルに見えるのですか」と、色々な人にたずねられます。特に何かトレーニングをしているとか、食品にこだわっているわけでもありません。でも、考えてみると、日々の生活の中で出会う草花や樹樹や虫たちに心いやされているのかもしれません。もちろん、子ども達からも刺激とパワーを一杯もらっています。

未来から来て、過去へと過ぎ去っていく時の流れの一瞬一瞬が尊い時間なのだと今更ながら思うのです。小さな生き物との出会いを楽しみにしながら……。

# 二学期のはじめに
## 私が心を痛めていること

「支援学級はいやなんです！行きたくないんです！」電話に出たとたん、名も告げずに、突然にこのことばが飛び出しました。私はしばらく聞いているしかありませんでした。

この方ほどでなくても、毎年この時期になると、次の年に、どこで学ぶことが我が子のためになるのかと迷われる保護者の方は多いと思います。私も、教育相談を受けたり、知能検査を実施したりする中で悩むことも多くあります。

### 検査は万能ではない

教育支援委員会では、医師の診断書や知能検査の結果が重要視されてしまうことが多いように思います。けれども本当は、毎日接しておられる先生たちが一番ご存知なのだろうと思います。

検査をすれば、数値が出てきます。それは客観的な値と考えられ、その数値によって様々な判断がなされます。しかし、アメリカの精神医学会の診断基準のDSM-5では、知能指数だけで知的障害と考えるべきではないと記されています。

検査は、心理士であれば、誰がやっても同じ値がでてくるでしょうか。それはちがうと思います。今まで何百人もの検査をしてきて、そう思います。そして、結果から具体的な支援や指導を導き出していくことも、個々の検査者によって異なっていると思います。

検査は個別のへやで行います。個別的に力があったとしても、集団の中で適応し、力が発揮できるかというと、決してそうではないでしょう。

そして、私が一番悩むのは、検査返しです。検査結果からその子の特性を分析することは可能です。「おそらく授業場面でこんなことがあるでしょう」とか「短期記憶の弱さがあって困っているでしょう」とか言うことはできますが、細かなことまで具体的にお話しようとすると、手持ちのカードの少なさに困ることがあります。検査の時には行動や動作を観察したり、表現の仕方や聞き方、鉛筆のもち方や力加減、漢字の形、目の動かし方等々、個別には様々な情報を取り入れているつもりですが、その子のことを十分にわかっているかというと、そうではありません。担任の先生から、本人の困り感を聞いていれば、もう少し具体的に言えたかなあと思うことも度々です。

## 子どもの実態把握

先日、井川先生とお話していたら、診断名をつけるのは、もうやめようかという話題になりました。診断名がなくても目の前の子どもを理解し、個別の支援計画が作成できなくては駄目でしょうというのが、きっと先生の思いなのでしょう。ASDだから…とかADHDだから…とか、診断名が一人歩きしてしまって、その子の実態からかけ離れてしまうことを危惧されているのでしょう。同じ診断名であっても一人ひとり違う子どもたち。アセスメントの大切さを私たちが分かっていなければいけないのでしょう。

身体の状態、感覚の問題、基本的な生活習慣、協調運動ことば、視機能、対人関係、適応力、落ちつきや集中保持、といったことから、自尊感情やこだわり、常同行動、学習面まで一人の子どもの姿を私たちは、どの位知っているのでしょう？

西濃圏域で行っているケース検討会や、県内の児童発達支援事業所で行っているネットワーク研究会では、子どもの実態把握と、そこから作り上げていく個別の指導計画、支援計画の作成へと一歩踏み込んでいけたらいいなと思っています。保護者と共に作っていくという点では、まだまだという所でしょうか。サポートブックの活用も含めて考えていくべきところでしょう。就学に関しても一緒に考えていきたいですね。保護者が納得できるのは、自分の子のことをよく知っていて、今だけでなく先も見通した上でアドバイスしてくれる担任のことばでしょうから……。

## 放課後等デイサービスの台頭

夏の間に、放課後等デイサービス事業所に訪問してきました。今年度、国がやっと重い腰を上げて、事業所の質の向上を言い出したのは、本当にありがたいことですが、いささか遅い気もしています。

事業所に要求されることは、子どもたちの発達の支援であり、一人ひとりの子に対してきちんとした個別の計画を立てて実践していくために、管理責任者が置かれることは、最低限の義務です。けれども、そんな最低限のことさえもできていない所もあり、質の向上に向けての課題は、余りにも多いと感じました。それなのに、それにも増して、驚いたことは、担任の先生の中に、事業所に対し「今日は、この宿題をお願いします」と依頼する人がいるという事実でした。このことを私たちは、どう考えたら良いのでしょうか？学校も私たちも保護者と共に協力し合って子育てをしていくことが必要だと思っていますけれど、本来保護者が為すべきことまで、頼んで

しまって良いのでしょうか。もちろん、保護者の方が病気であるとか、育児をしていくのに困難さがある方もいらっしゃるでしょうが……。「子どもたちの教育的ニーズと保護者の要望とは必ずしも一致しないし、私たちはそこをしっかり見極めていくべきだ」ということは、以前から危ぶまれてきたことでした。

「今さえ楽であれば…」「今さえ良ければ…」では、ありません。子どもたちの将来を考えた上で、今、何が必要なのか、お父さんやお母さんが真剣に考えてほしいのです。

世の中はどんどん変わっていきます。平和で豊かな生活が未来永劫つづいて行ってほしいと思いますが、世界情勢も心配ですし、何だか不安がいっぱいです。

私たちの生活は豊かになり、文化的な生活は便利で清潔で、機械がやってくれることで、本当に楽になったと思うのです。でも一方で、そういう文化的で便利な生活は子どもたちの体の発達に影響を与え、スマホの普及は子どもたちのことばの発達や母子関係に影響を与え、社会性の芽もつんでいきます。

これからの社会が本当に子どもたちの未来を保障してくれるのかどうか、どうもあやしくなって来ていませんか？福祉予算は増えつづけています。少子高齢化はすすみ、年金制度も危うくなってきています。

障害をもった子のために、親亡き後の保障をと考えられた入所施設のベッド数も年々減少させられていっています。「地域の中で見守り、育てていきましょう」と言って下さる方は多いかもしれませんが、今は昔のような地域のつながりも無くなってきています。障害をもつ子どもたちが大人になった時にどんな世の中になっているのか、想像してみても、私にはバラ色の未来が見えて来ないのです。

福祉が営利目的になってきている今、半世紀前に考えていた福祉社会とは全く違ったものになってきていると思っています。先日、ある保護者の方に「先生が事業所をやって下さいよ」と言われてしまいました。そうですね、この私に今、できることを、同じように憂いている仲間たちやお母さんたちと手をたずさえて進むしかありませんよね……。

二学期です。運動会シーズンです。きっと学校が辛くなる子がいっぱいいるだろうな……心配している私です。私は九月十九～二十二日まで国研修に出かけます。法改正もあるようなので……。

十月十六日の親の会で、又、お話しします。